

鷺沢萌『ケナリも花、サクラも花』論―語りと言語に注目して―

坂口 綾香

一 はじめに

鷺沢萌（一九六八～二〇〇四）は一九八七年に「川べりの道」を執筆し、文壇新人賞を当時最年少で受賞してデビューした作家である。その後刊行した単行本『少年たちの終わらない夜』、『帰れぬ人びと』はベストセラーになった。「ほおずきの花束」、「指」など中学校や高等学校の国語教科書に掲載されたテキストも複数ある¹。

鷺沢は、後に泉鏡花賞を受賞した「駆ける少年」を執筆するための資料を探していた一九八九年に、自身の戸籍から父方の祖母が朝鮮半島出身者であることを知る。そして一九九三年一月から、韓国語を学ぶため半年間韓国に留学をしている。そのときの出来事を主な内容としているのがエッセイ『ケナリも花、サクラも花』新潮社、一九九四）である。このテキストは、韓国での学友との交流、日韓の間での苛立ち、自分は（僑胞）²なのかというアイデンティティの葛藤、祖母と父と「わたし」をつなぐ血のつながりなどに思いを巡らせた「韓国留学記」³である。

『ケナリも花、サクラも花』の先行研究においては、二〇歳を過ぎてから「朝鮮半島の血を引いていることを知」⁴った鷺沢のアイデンティティがたびたび問題とされてきた。たとえば朴育美（二〇一一）はテキストにおける語りを縛る「国籍Ⅱ民族Ⅱ血」という日本

社会のディスコース（一九九頁）⁵に注目し、語りに働いている力学を明らかにした。康潤伊（二〇一三）は『ケナリも花、サクラも花』を教材として分析するにあたって朴論に応答し、「日本人」と「僑胞」を自在に使い分けていく「鷺沢のアイデンティティのゆらぎと」、「そのゆらぎを許容せず彼女を「本質的に」規定しようとする日本社会の（力学）」（二三二頁）⁶を指摘している。また、平田由美（二〇〇五）は言語使用の観点から「絶えず変容して固着することのないわたしたちのアイデンティティを弁ずることのできる、不純で不完全なごちゃまぜ言語の可能性」（一九四頁）⁷を見出している。

以上の先行論は、「祖母だけ韓国人」という「名づけようのない血を持った」⁸鷺沢のアイデンティティのありようを明らかにしている。そしていずれもテキストの分析を通して、作者である鷺沢の認識を明らかにする試みであるといえよう。

たしかに『ケナリも花、サクラも花』が鷺沢の「極私的留学記」⁹として提示されていることから、鷺沢とテキストとを完全に切り離して考えることは不可能であろうし、不適当でもあるだろう。しかし、アイデンティティの問題に限らず、このテキストにおいて語りがいかに構築され、いかなるアクションが行われているのかについては、今後さらに吟味される必要があると考える。なぜなら、この

エッセイで語られている韓国留学体験は、後年の鷺沢の創作に大きな影響を与えているからである。たとえば後のエッセイにおいても鷺沢は韓国留学時のことに繰り返し言及しているし¹⁰、「在日韓国人三世」を描いた鷺沢の小説への影響¹¹も見過ごせない。

そこで本稿では、とりわけ語りと言語の観点から『ケナリも花、サクラも花』のテキスト分析を行い、それに基づいて本テキストの特質の一面面を明らかにする。このことを通して、鷺沢萌とそのテキストについての研究の足場を築きたい。

以下、本稿における本文引用はすべて鷺沢萌『ケナリも花、サクラも花』（新潮社、一九九四）に拠った。また引用文中の傍線は執筆者が付したものである。

二 「現在進行形」の語り

『ケナリも花、サクラも花』における語りの特徴とは何か。いくつかの先行論では、テキストにおける語りのゆらぎが指摘されている。

たとえば平田（二〇〇五）はテキストにおける鷺沢のアイデンティティの変容と「語学留学生としての半年間を過ごしたソウルの日々の中で書き起こされ、そこから書き送られた、同時進行的なテキスト」（二七〇頁）とのつながりを示唆している。しかし平田論では「同時進行的なテキスト」についてそれ以上踏み込んだ分析はなされていない。康潤伊（二〇一六）¹²も「僑胞」と「日本人」という二つの立場を使い分けた結果、無名性を引き受ける地点に至ったという一連の過程を析出することができる（二四五頁）と、テキストから読み取れるアイデンティティの語りのゆらぎを指摘している。しかし、平田（二〇〇五）が示した「同時進行的なテキスト」

についての言及はない。

「同時進行的なテキスト」とは、『ケナリも花、サクラも花』の初出に関わって指摘されている特徴である。ここで、テキストの初出について確認したい。

『ケナリも花、サクラも花』の第一章から第八章は、雑誌『新潮』（新潮社）の一九九三年三月号〜一月号（六月号は休載）に連載された「ウリナラ日記」¹³が元になっている。それらに加えて、雑誌『波』（新潮社）の一九九三年一月号にて発表された「コンプハゲッソヨ（勉強します）」を序章に、さらに書き下ろしのエッセイを終章にしたものが、単行本『ケナリも花、サクラも花』である¹⁴。

このようなテキスト成立の経緯を踏まえると、先行研究で指摘されている語りのゆらぎについて考えるにあたっては、鷺沢の留学と平行した「現在進行形」¹⁵のテキストに関して、さらなる検討の余地があるといえるだろう。

そこで以下では「ウリナラ日記」（以下、本稿では「初出」とする）と『ケナリも花、サクラも花』（以下、本稿では『単行本』とする）双方に焦点を当てる。まず「初出」における「現在進行形」の語りについて分析したのち、「初出」と『単行本』とを比較しながら、テキストに存在する語り直しを指摘する。それらを通して、テキストにおける語りのゆらぎがどのように生まれているのか明らかにしたい。それは、テキストから鷺沢のアクションの一端を読み取ることにもつながるだろう。

まず「初出」における「現在進行形」の語りについて論じる。序章から終章までのテキストが最初から一冊にまとめられている『単行本』だけを見るとわかりにくいだが、「初出」の発表形態に注目すること、その語りの特徴が明確になる。

鷺沢の韓国留学の期間は、一九九三年一月から六月までの半年間である。「初出」はその留学と平行しながら、一九九三年三月から一月まで毎月（六月は除く）連載された。このことから、「初出」のテキストは鷺沢の韓国留学と同時期に、一カ月ずつ語りの現在を更新しながら語られたものであることがわかる。

そのような語りは、たとえば留学にまつすべての出来事が終わった時点で語りの現在を設定し、留学時の出来事を振り返って語るような語りの形式とはどのように異なっているのだろうか。

留学後に語りの現在を置き、そこから留学を振り返る形式の語りの場合、語りの現在には留学後という一点にほぼ固定される。それによって、その一点を基点に留学という過去の出来事を意味付けながら語っていくことができる。そのような語りには、ある程度の一貫性を保障することが可能であろう。

しかし「初出」では、連載という形態ゆえに一カ月ごとに語りの現在が更新されている。そのような語りの場合、留学を通して時々刻々と変化する作者鷺沢の心境が、一話『単行本』でいうと一章ごとにテキストに反映され得る。結果的に、そのような語りに一貫性は必ずしも保障されないであろう。その意味で「初出」のテキストの語りは「現在進行形」だといえる。

三 「初出」と『単行本』におけるタイトルの差異

ここからは前節で述べたことを踏まえつつ、「初出」と『単行本』の間の差異についての具体的な検討に入る。

まず、「初出」と『単行本』におけるタイトルの付され方の違いについて考える。

「初出」の「ウリナラ日記」というタイトルは、連載の初回であ

る一九九三年三月に、第一話のテキストとともに『小説新潮』に掲載されている。このことから、タイトルが少なくとも一九九三年三月までには決定されていたことがわかる。鷺沢の帰国が一九九三年六月であることを考えると、「ウリナラ日記」というタイトルは、少なくとも一九九三年三月以前、つまり鷺沢の留学の最中あるいはそれ以前に付されたものだといえる。加えて最終話である第八話の掲載が同年一月であることを踏まえると、「ウリナラ日記」とは後に『単行本』に収録される第一話から第八話までのテキスト全体に先立って付されたタイトルであることもわかる。

では、『単行本』のタイトルはどのように付されたのか。

鷺沢の「日記風エッセイ集」である『月刊サギサワ』¹⁶には、『単行本』についての言及が見られる。まず「初出」連載中の一九九三年一〇月の時点では『ウリナラ日記』の単行本用のゲラ（一七五頁）という言葉が選択されている。このことから、この時点ではまだ『単行本』のタイトルが未定であることが読み取れる。

しかし、「ウリナラ日記」の連載が終了した同年十二月には、「二月発行予定の拙著『ケナリも花、サクラも花』（一九六頁）」という形で『単行本』への言及がなされている。ここに「ウリナラ日記」から「ケナリも花、サクラも花」へのタイトルの変更を見ることができ。つまり『単行本』のタイトルは「初出」とは異なり、韓国留学を通して生まれたすべてのテキストを踏まえ、留学終了後に語りの現在を置いて付されたタイトルだといえる。

鷺沢は『単行本』の「新刊インタビュー」において、タイトルについて次のように語っている。

滞在中に色々なものが見えるようになってきた自分とイメージ

が重なっているような気がしますし、日本人とか韓国人とかいったことにこだわるのはやめよう、といった気持ちやいろんなものが、このタイトルには込められています。¹⁷

ここから、『単行本』のタイトルの特徴の一つが、留学後の驚沢の心境が反映されていることだと指摘できる。それは、タイトルが「初出」連載終了後に付けられたからこそ生まれた特徴だといえる¹⁸。

四 「初出」と『単行本』における本文異同

ここからは、「初出」と『単行本』の間に存在する本文異同、すなわち語り直しについて検討する。

「初出」での第一話から第八話は、『単行本』の第一章から第八章に対応する。そこには助詞の変化やエピソードの追加がいくつか見られるものの、大筋のところで「初出」からの大きな変更は見られない。しかし何箇所か、語りの内容やニュアンスに少なからず変化を与える語り直しが見られる。ここでは、二つの例を挙げて検討する。

一つ目は第一章における、「ことば」に関する語りである。

「ウリナラ日記」第一話

「またいだきまーすて、やってやあ」

瞬間その意味が掴めなかったわたしだが、すぐに判って思わずにやっとした。人と人とのあいだには、必ずことばが媒体として存在する。ことばは、人間が最初に手に入れ、最後まで有効なたったひとつの道具である。

(三月号・二八二頁)

『ケナリも花、サクラも花』第一章

「またいだきまーすて、やってやあ」

瞬間その意味が掴めなかったわたしだが、すぐに判って思わずにやっとした。どういうふうにも、人と人はつながっているものなのだ。

ことばは、そのための道具だとわたしは思う。人と人をつなぐための、これ以上はないくらいに素敵な道具だ。けれどいくら素敵な道具でも、道具は道具で、それ以上のものにもそれ以下のものにもなり得ない。だからそれに対しては真剣に向き合わないといけないし、他のことのためには絶対に使ってほしくないのだ。

(三五―三六頁)

このように、「初出」での「ことばは、人間が最初に手に入れ、最後まで有効なたったひとつの道具である」という語りは単行本化にあたって大きく変更されている。最も大きな変化は、言語に「人と人をつなぐ」という用途を見出し、その扱い方に注意を向けている点である。そこには、韓国語を話せない人に向かって「ここは韓国なのだから韓国語で話せ」と言ったり¹⁹、ある言語の話者が非母語話者の「完璧ではない」言語を笑ったり²⁰するような、排他的で抑圧的な言語観への批判が込められていると考えられる。言語に関する議論は本稿第六節でまた詳しく扱う。

二つ目は、『単行本』と同じタイトルを持つ第七章における語りである。少し長くなるが、以下に引用する。

「ウリナラ日記」第七話

部屋に戻って、受け取った雑誌をめくった。満開の「ケナリ」を背景に立っているわたしの写真があった。ケナリのさらにむこう側には、ぼんやりと白っぽい花も写っている。春らしくていい写真だったが、しかし肥えたなあ、あたし……、などと考え、ぶつぶつ言いながら懸命にハングル文字を追っていたとき、わたしは思わず声をあげた。

写真の下に付いたキャプションである。

——鷺沢萌は、私たちの国が愛する花、ケナリの名前を訊ねた。盛りの季節のケナリのむこうでは、サクラの花も美しく咲いているのが見える。

うわあ……、と思った。スヨンが書いたのだ、と思った。

(一〇月号・三〇九—三一〇頁)

『ケナリも花、サクラも花』第七章

部屋に戻って、受け取った雑誌をめくった。たまたま友だちが遊びにきて、わたしより数倍韓国語の上手い彼に「〇×ってどういう意味でしたっけー」などと何度も訊きながら、雑誌の上に整然と並んだハングル文字を懸命に追ってみた。満開の「ケナリ」を背景に立っているわたしの写真がある。ケナリのさらにむこう側には、ぼんやりと白い花も写っている。春らしくていい写真だったが、渡韓後の自分の肥えようにぶつぶつ文句を言っているとき、友だちのほうにわたしより先にその数行に気付いた。

「ここ読んだ？」

彼はそう言いながら、その数行を指で押さえた。写真の下に

付いたキャプションであった。

——鷺沢萌は、私たちの国が愛する花、ケナリの名前を訊ねた。盛りの季節のケナリのむこうでは、サクラの花も美しく咲いているのが見える。

あッ……、と声を洩らしたわたしの横で、友だちはにやつと笑い、そして言った。

「ええこと書いてあるやん」

「うん……」

スヨンが書いたのだ、と思った。

(一五一—一五二頁)

ここでまず指摘できるのは、「キャプション」を発見する状況の差異である。「初出」では鷺沢が自分で「キャプション」に気づく。しかし『単行本』においては、「初出」では書かれていなかった「友だち」が登場し、その「友だち」の指摘によって「キャプション」に気づく。さらに「初出」で鷺沢は自分が「肥えた」ことを考えて「ぶつぶつ言い」ながらも「懸命に」雑誌を読んでいたのに対して、『単行本』では、鷺沢が「自分のあまりの肥えようにぶつぶつ文句を言っていたとき」、「友だち」が先に「キャプション」に気づいたと語られる。このように、『単行本』での「キャプション」の発見は、「友だち」という第三者の指摘による思いがけないものとして語り直されている。

次に指摘できるのは、「初出」では「白っぽい花」とされていた「サクラの花」の描写が、『単行本』では「白い花」となっていることである。このことは、「初出」では色すらもよく見えてなかった「サクラの花」が、『単行本』でより鮮明に描かれたと見ることができる。

このような「サクラ」の強調は、『ケナリも花、サクラも花』という『単行本』のタイトルを想起させる。このように、このテキストは「初出」から『単行本』に至る際に行われた重要な語り直しを含んでいる。

ここまでに述べたことをまとめる。『ケナリも花、サクラも花』のテキストは、語りの現在が一月ごとに更新されているという意味で「現在進行形」である。それは、連載という「初出」の発表形態が生み出した語りの特徴であるといえる。そして、このテキストには「初出」から『単行本』への流れに起因する、複数のレベルの語り直しが存在している。このことが、平田（二〇〇五）や康（二〇一六）が指摘する、語りのゆらぎの一因であると考えられる。

五 読み手に対する意識

前節までの議論を踏まえていえるのは、『ケナリも花、サクラも花』は必ずしも事実をありのままに語ったエッセイではないことである。そしてそこには、読み手に対してテキストをいかに提示するかということへの意識の表れを読むことができる。

以下に示すのは、第四章の語りである。

正直に言えば、もう書きたくないなあ、と思うことがある。
この国について書くことにも、書いたことについていろいろ言われるのにも、結構疲れてきている。かといってわたしは読者を想定しているわけでは全然なく、ただ自分が書きいいように、
気持ちいいように書いていただけなのだ。

（八九頁）

ここからは、「読者を想定」せず、「書きいいように、気持ちいいように書いている」という語りのスタンスが読み取れる。しかしそのような語りの一方で、テキストには言葉の受け手である読者を想定して働きかけていくような語りも存在する。本節ではその両面に着目して、語りから窺える、読み手に対する意識についてさらに考察を進める。

まずは、読者を意識していないと語る語りについて確認する。鷺沢は雑誌のインタビューで『ケナリも花、サクラも花』について、「ただひたすら私の個人的な主観を書き連ねたこの本」²¹と述べている。この語りでは、鷺沢が語りたいことを語っているという、テキストの個人的な語りの側面が強調されている。

たとえば「自分が望んで来た国で、自分が望んで書いている」（第四章）という語りや、「その嬉しさと、スヨンというわたしと同年のチャーミングな女性のことを話したかっただけなのだ」（第七章）という語りも、『ケナリも花、サクラも花』が読み手を意識して語られたものというよりは、鷺沢の書きたい、話したいという気持ちに従って生まれたテキストであることを提示している。さらにそのような個人的な語りは、「ここからはわたしの個人的な考えだが」とわざわざ断ってからなされる語りや、「サワサワが来た」（序章）、「捨て身のヤツ」（第四章）、「あら、熱が取れる」（第四章、傍点原文ママ）などの鷺沢独自の用語を用いた語りからも見出せる。

しかし一方で、読み手が想定されていると考えられる語りもある。

だからわたしはこの一件を土台にして、というわけで相互理解
ってものはね、とか、お互いの文化に敬意を払うっていうのは
ね、とか言うつもりはない。全然ない。そうなのだ、相互理解

なんてくそくらえなのだ。

(一五二頁)

第七章ではこのように、引用部の直前で語られたスヨンとのエピソードが「相互理解」という文脈で解釈されることを拒否する語りが行われている。この語りは、スヨンとのエピソードを「相互理解」の枠組みで読む読み手の存在が想定されているからこそ生まれたものだといえるだろう。

ここで鷺沢の、「自分」と「他者」についての発言を引用する。以下に示したのは、重松清が鷺沢のテキストを「関係性の文学」と称したことを受けて、鷺沢が語ったものである。

他者なしの自分というのはあり得ないと思ってます。言葉にするときれいな事になってしまうんですけど、私という自分は他人によってつくられていると思うんですよ。(中略)
たとえば「私は強い」とか、「私は傷ついている」とか、「私は弱い」とかいうのでも、それを認識してくれる他者なしには自分の言葉も発せられないというふうに考えているんですよ。²²

この引用では、鷺沢が「自分」を成り立たせるための「自分以外の他者」の存在を強く意識していたことが語られている。ここから、「自分が書きやすいように」書かれたテキストにもやはり「認識してくれる他者」である読み手が想定されていると考えられる。²³
読み手に対する意識が読み取れる箇所は他にもある。

わたしは「何かと闘おう」としているわけでは決していないし

「人々の蒙を啓こう」としているわけではもつとない。

けれど今みたいな無力感に襲われるとき、わたしはやはり自分なら何かできるんじゃないか、などという甚だしい勘違いをしていたのではなかったか、と思わざるを得ないのである。自らが先に挙げたことばを使っているえば、「韓国」や「朝鮮」を、茫洋として不明なところの多いひとまとめにして考えているたくさんの方々の人たちに、どうにかして何ものかを伝えることができるんじゃないか、などと自分を買いかぶっていたかも知れないのである。

(六五頁)

この部分は、語りにおける読み手への姿勢が一貫していないことが自覚されている点でも興味深い。「闘おうとしているわけ」でも「蒙を啓こうとしているわけでもない」という語りからは、言葉の受け手を想定しない態度が読み取れる。しかし「どうにかして何ものかを伝えることができるんじゃないか」という語りからは、何かを伝える対象としての読み手が明らかに想定されていることがわかる。ここからは、言葉の受け手に対して働きかけようとしつつも、そこに生じる摩擦を自覚して悩む様子を見取ることができる。

それでも、「初出」の最終話にあたる第八章において鷺沢は「ちょっと見にはとても人間の力では埋められそうにないように見える深い深い穴に投じられる」「ひと欠らの石」によって「世界はだんだんに良くなっている」といい、自らも「石」になりたいと語る。そして、以下の語りで第八章を締めくくる。

ここ一年ほどのあいだで、わたしが身体に刻みつけるように

して勉強してきたことを総括するならば、「言わなきや誰にも判らない」という甚だシンプルなひと言に尽きる。(中略)

そうしてもうひとつ、「もしかしたら……」と考えていることは、呪文のように唱え続けられいつかそれが実現する日が来るんじゃないだろうか、ということである。

だから、わたしは、書こうと思う。

(一六九頁)

ここでの「言わなきや誰にも判らない」という語りには、間違はなく言葉の受け手として、わかってほしい「自分以外の他者」の存在が前提されている²⁴。

以上のように、このテキストにおける語りには「読者を想定しているわけでは全然なく」、「書きいいように、気持ちいいように書いている」というように読み手への意識を否定する側面と、言葉の受け手がいなければ語りが成立しないことを強く認識し、語りを通して読み手と関わろうとする側面とがゆらぎながら共存している。そのゆらぎを自覚しつつ、それでも「言わなきや誰にも判らない」と語る第八章で特に強く表れているのは、人と関わることで生じる摩擦を受け止め、その上で語り続ける姿勢ではないか。

六 個別具体的な言語実践

前節で指摘した語りの姿勢からは、言葉を通して人とつながることへの強い志向を見出すことができる。本節ではこのことを踏まえつつ、テキストにおいて語られている具体的な言語実践に焦点を当てる。

このテキストにおいて、言語は大きな問題となる。その大きな要

因の一つが、〈日本人〉でも〈韓国人〉でもない存在としての〈僑胞〉にとつて、ナショナルな枠組みに沿った自明の〈母国語〉を持ち、使用することが極めて困難であることだろう。驚沢自身はテキストにおいて〈僑胞〉と経験を共有したり隔てられたりしながら語っていき、第八章において「わたしのことを僑胞だと思う人にとつては僑胞だし、そうではないと思う人にとつてはそうではないのだろう、くらいのものである」という語りに至る。本稿ではテキストから読み取れる驚沢のアイデンティティについてはこれ以上立ち入らないが、人を〈日本人〉や〈韓国人〉といったナショナルな集団に組み入れようとする力学に対して抵抗を感じざるを得ないという立場に関して、驚沢と〈僑胞〉とは類似しているといえよう。

テキストにおいて、「ことば」は「人と人をつなぐ」ための「道具」で、「それ以上のものにもそれ以下のものにもなり得ない」、「だからそれに対しては真剣に向きあわないといけないし、他のことのためには絶対に使ってほしくない」と語られていることは、本稿でもすでに述べた通りである。それでは『ケナリも花、サクラも花』において、「人と人をつなぐ」言語実践はいかなる形で創造されているのか。

ここで参照したいのが康(二〇一六)である。ここでは教材論の観点から、第七章におけるスヨンとのエピソードを「ナショナルな」枠組みではなく「パーソナルな」ものとして捉える必要性が指摘されている(一五二頁)。本節では康論に基本的に同意をしつつ、テキストにおける第一言語を共有しない状況での人と人とのやり取りに注目してさらに検討を進めることで、「パーソナルな」言語の可能性について考察を深める。具体的には序章における、韓国語を学んでいる最中の驚沢と、恐らく第一言語ではない日本語を用いる「窓口

の女の子」とのやり取りについて論じる。

序章における「窓口の女の子」とのやり取りは、驚沢が日本国内にある韓国大使館領事部で留学に際して発給されたビザを受け取る、という場面で行われる。日本の中の韓国大使館領事部という場所の特殊性、そして日本国籍を持つ驚沢が韓国に留学する資格を得るためのビザを受け取るという状況など、ここでの場面設定は幾重にも境界的である。そしてそこの言語実践は、驚沢が受領の半券を紛失するという出来事によって個別的なものへとずらされていく。

まずは、大使館におけるビザの受領という公的で形式的な状況で行われるはずであったやりとりが、どのように私的なものへと変形させられているかについて分析する。

驚沢がビザ受領のための半券を紛失したことを聞いた「窓口の女の子」は、顔をしかめて「もうイヤになってしまふ」という意味の韓国語を口にし、これから必要となる手間を「興奮のせいか韓国語と日本語とごっちゃになりながら」話す。それに対して驚沢は、涙をこらえながら韓国語で応答する。ここで行われている感情的なやり取りは、ビザの受領の形式的な型からは逸脱しているといえる。

涙をこらえながらの驚沢の応答に対して「しかめつばなしの顔で少し笑った」「窓口の女の子」は、「手を動かしながら」驚沢に「留学生ですか」「いつから?」と韓国語で問いかける。驚沢も韓国語で「そうです。延大で勉強します」「来年の一月からです」と答える。ここでの会話もビザの受領に必ずしも必要ない、個別的なやり取りである。

そしてビザの受領を終え、驚沢が「ありがとうございました」と二回言って帰ろうとしたとき、「窓口の女の子」は「ガンバッテネ」と日本語で声をかける。それを聞くと「さっきまで目のふちまでせ

りあがっていた涙は急速に引っこみ、階段を降りながらわたしはにやにや笑いさえ洩らしていた」と語られ、そこで序章が締めくくられる。ここでの「窓口の女の子」と驚沢の日本語でのやり取りも、ビザの受領という枠を超えた個別的な会話だといえる。

このように、序章では驚沢のビザ受領の半券の紛失をきっかけに、「窓口の女の子」との個別的なやり取りが生起している。半券を紛失した旨を伝える場面のあとに、語りにおける「窓口の女の子」の呼称が「隙のない化粧をした彼女」と変化していることから、大使館領事部で窓口業務を担当する女性として公的な立場から語られていた人物が、より私的で個別的な人物として認識されるようになったと解釈できる。

そして以上の場面でもう一つ特徴的なのが、〈完璧〉ではない言語によるやり取りである。たとえば「窓口の女の子」は半券を失くした驚沢に対して「興奮のせいか韓国語と日本語とごっちゃになりながら」話し、それに対して驚沢は「普段だったらそんな内容のことは考えてからでないと口をついて出ない」ような韓国語をとっさに「早口」で話している。ここでの驚沢から発せられた韓国語も、「窓口の女の子」から発せられた日本語も、母語話者にとっては多少の違和を感じさせるものであった可能性が高いだろう。

さらに、「窓口の女の子」から発せられた「ガンバッテネ」という日本語は、テキストにおいて片仮名で表記されている。これは、二人の間で交わされた言語が〈完璧〉なものではないことを表記の面でも示していると解釈できる。

ここまで、序章における「窓口の女の子」との言語実践を分析してきた。この場面からは、公的な形式を逸脱してそれぞれの場面で使用された〈完璧〉でない言語のやり取りによって、人と人の関係

性が築かれていることが読み取れる。また、この部分が、『単行本』においてはじめて序章という形で「初出」のテキスト群の前に置かれたということも重要であろう。『単行本』の冒頭に配置された「窓口の女の子」との言語実践は、『ケナリも花、サクラも花』における「人と人をつなぐ」言語使用のスタンスを象徴的に示す効果を生み出しているのではないだろうか。

ただしここで注意しておきたいことは、以上で分析してきた場面においても、言語間の力関係から完全に自由ではあり得ないことである。たとえば、鷺沢の韓国語を聞いて「苦笑」のような表情を浮かべる「窓口の女の子」が、〈完璧〉な韓国語と鷺沢の韓国語との間の相違を感じていた可能性も否定できない。

康論で検討されていた、第七章におけるスヨンとのやり取りにも同様のことがいえる。康（二〇一六）はスヨンと鷺沢の個別的関係が英語も交えながら構築されることの効果について「日本と韓国という図式を相対化する」（二五二頁）と述べる。しかし、そこには韓国で英語が話されることの言語帝国主義的な意味や、韓国ではとて有名な婦人雑誌の編集者」で、「大学では英文学を専攻していた」ために「一般的な韓国人よりも英語を上手に操」ることができるスヨンの社会的階級性の問題が付随していることも無視できない。

ただこのテキストにおいては、そのような力にさらされながらも、やはり「人と人をつなぐ」言語の可能性が模索されていることを強調しておきたい。なぜならそれは、支配者の言語である日本語を用いても、〈外国語〉である韓国語を用いても、言語をめぐるナショナルな力関係の中に複雑に絡めとられざるを得ない²⁵（僑胞）の言語実践の問題へも接続され得る観点だからである。発せられた言語には権力性や抑圧性が絡みつき、人と人の間に摩擦を起こす。それで

もその摩擦を忌避することなく、個別具体的な関係を構築するために言語を使用することで、その場その場で〈日本語〉、〈韓国語〉といった国家を前提とした〈完璧〉な言語は変形していく。

このように『ケナリも花、サクラも花』からは、言語使用によって個別的な言語や関係性を見出す試みの困難さと可能性を読み取ることができる。

七 おわりに

本稿では、『ケナリも花、サクラも花』のテキストを、語りと言語の観点から分析した。

まず「初出」と『単行本』とを比較しながら分析することで、「初出」の「現在進行形」の語りを指摘するとともに、テキストに存在する複数のレベルの語り直しを示した。それから、読み手を想定していないとする語りと、明らかに読み手を意識している語りとの間にゆれ動きがあることを指摘した。これらはいずれも、読み手を意識してテキストを構成する姿勢の表れとしてみることができる。

次に、テキストにみられる言語実践の問題に注目した。ここでは国家と結びつくことで抑圧性や排他性を帯びる言語の側面を認識しつつ、言語の共有が自明ではない相手と個別的関係を結ぼうとする言語実践の困難さと可能性の両面を読み解いた。

本稿で示した語り直しも言語実践も、人と関わりとうとすることで起きる摩擦を自覚しながらも、その場その場において「ことば」を用いて関係性を構築するためのアクションとして読み取れる。これが、本テキストの大きな特質の一つだと結論付けられる。

今後の課題を二点挙げる。まず『ケナリも花、サクラも花』を一連の鷺沢のテキストに対してどのように位置づけるのかという問題

がある。「葉桜の日」、「君はこの国を好きか」、「眼鏡越しの空」などの「在日韓国人三世」を描いたテキストに加え、直接的に〈在日〉を描いていないテキスト、さらには鷺沢が自らと朝鮮半島との関わりを知る以前のテキストとの関係についても、さらなる検討が必要である。

また、テキストあるいはテキストから読み取れる鷺沢のアクションの特質をさらに明確に提示するためには、〈在日〉に関わる同時代的な言説を精査することと必要だと考えている。鷺沢はテキストにおいて、〈在日〉に関わる問題に対して踏み出そうとしない〈日本人〉への苛立ちを何度もあらわにしている。『ケナリも花、サクラも花』が発表された一九九四年頃に流通していた〈在日〉に関する言説の中に本テキストを置き直すことで、そこで行われていたことの意義をさらに明確にすることができると考える。

注

¹ 阿武泉『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品 13000』（日外アソシエーツ、二〇〇八、二八九頁）。『ケナリも花、サクラも花』も過去に学校図書『中学校国語3』において教材化されている。

² 本稿においては、日本に定住している朝鮮半島出身者及びその子孫を（在日）と表記する。『ケナリも花、サクラも花』においては「僑胞」という語が用いられ、それは「在外朝鮮・韓国人（朝鮮半島以外のところに定住している同胞）」の総称であり、「韓国人で韓国籍を持ちながら日本に育ち、日本の教育を受け、家庭の中ではいくらかの韓国の風習やしきたりを持ち続けているもの、考え方や感じ方は韓国人よりかは日本人に近い、

という人間の集団」で「そういう人たちの何割かは韓国語も話せない」と説明されている。本稿で〈僑胞〉と表記する際は、この定義に従う。ただしそのような定義は、たとえば朝鮮籍の〈在日〉や日本国籍を取得した〈在日〉、「ニューカマー」と呼ばれる〈在日〉などの存在を盲点とするものであることは指摘しなければならない。

³ 鷺沢萌「自作解題&著訳書一覧」（鷺沢萌―『私の話』スペシャル★何があってもダイジョーブ 1968-2003）（河出書房新社『文芸』第四二巻第一号、二〇〇三・二、三一頁）

⁴ 鷺沢萌「豊かさへの飢えゆえに」（注3前掲誌、一二頁）

⁵ 朴育美「アイデンティティの語りを成り立たせているもの―『ケナリも花、サクラも花』のナラティブ分析が顕在化させる日本社会のディスコースの前提―」（関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部『関西外国語大学研究論集』九四巻、二〇一・九）

⁶ 康潤伊「ふたつの花に託されるもの―鷺沢萌「ケナリも花、サクラも花」教材と作品の齟齬―」（早稲田大学大学院教育学研究科千葉・金井・石原・和田研究室『近代文学 研究と資料 第二次』七巻、二〇一三・三）

⁷ 平田由美「非・決定のアイデンティティ 鷺沢萌『ケナリも花、サクラも花』の解説を書きなおす」（上野千鶴子『脱アイデンティティ』勁草書房、二〇〇五・一二）

⁸ 柳美里「解説」（鷺沢萌『ケナリも花、サクラも花』新潮文庫、一九九七、一七八頁）

⁹ 鷺沢萌『ケナリも花、サクラも花』（新潮社、一九九四）の帯より引用。
¹⁰ たとえば「七年後、そして十年後」（鷺沢萌『かわいい子には旅をさせるな』大和書房、二〇〇四、二二六―二二一頁）では、韓国留学の七年後

〈僑胞〉が日本語を話すことにはその事実以上の政治的な意味を伴う。そして〈僑胞〉が韓国語を話す際にも、〈僑胞〉にとつて第二言語である韓国語は、〈完璧〉な言語という考え方の前では排除を受ける。そしてそのことが、「韓国人のくせに韓国語も話せない」（鷺沢萌・永江朗「私小説嫌いの作家が初めて書いた私小説——そんなに数奇な人生なのかよ」（注3 前掲誌、五五頁））という言説や、「ここは韓国なのだから韓国語で話せ」という言動につながってしまう。このような点から〈僑胞〉の言語実践の困難を推し量ることができる。

付記

本稿は、令和三年度大阪大学文学部人文学科日本文学・国語学専修の卒業論文として執筆した内容の一部をまとめたものです。ご指導いただきました大阪大学の斎藤理生先生と渡邊英理先生に深く感謝申し上げます。

（広島大学大学院博士課程前期一年）